

昭和五十八年十一月二十七日郷土研究会資料

第一三八回

史跡めぐり資料

(園田川のほとり・伝説を訪ねて)

越谷市郷土研究会

第一二八回 史跡めぐり案内

(隅田川のほとり・伝説を訪ねて)

とき 十一月二十七日(日)

集合 午前八時三十分 越谷駅前

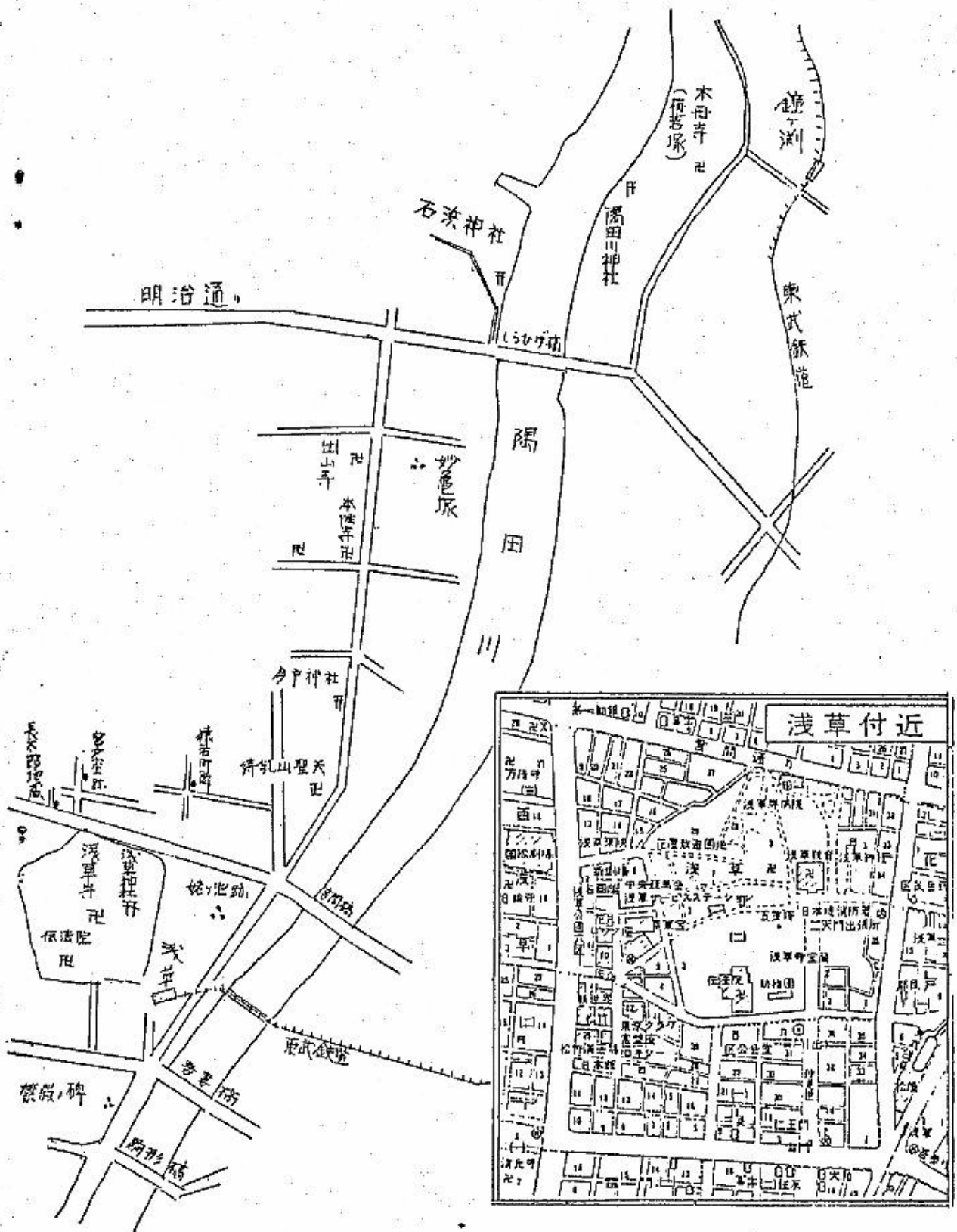
コース 越谷駅——鐘ヶ淵駅——木母寺・(梅若塚)——隅田川神社——

石浜神社(石浜の城址)——鐘ヶ淵駅——浅草駅

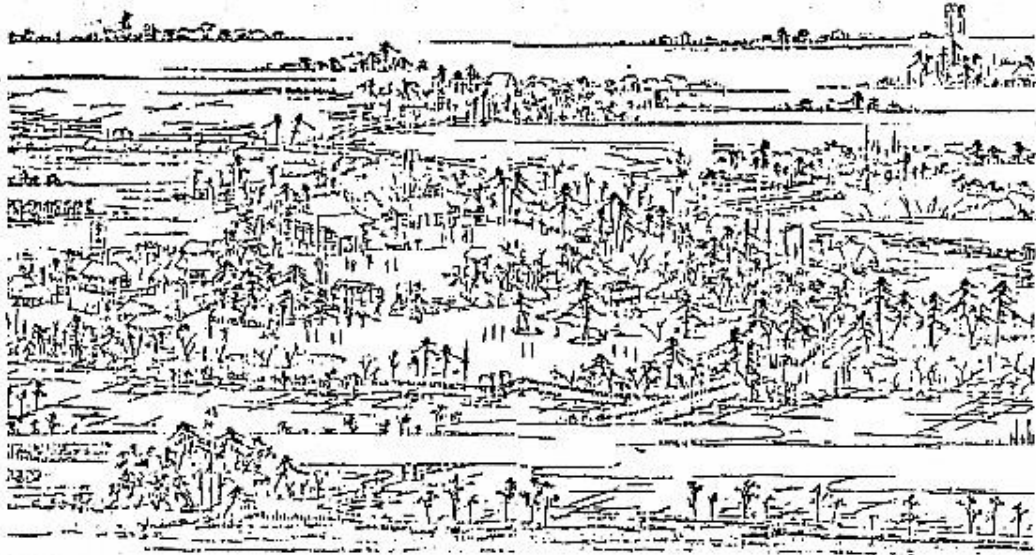
昼食

浅草観音・浅草神社——長太郎地蔵尊——宮戸座跡——猿若町碑  
——待乳山聖天——姥ヶ池旧蹟——浅草駅——越谷駅

案内者 山田政信



隅田川旧跡塚 梅若 木母寺



(木母年略誌ヨリ)

梅柳山木母寺 隅田川村屋のもとにあり。隅田川と号す。天台宗にして東  
 叡山に属す。本寺は五神如來なり。中にも阿彌陀如來の像は徳徳太子の作  
 なりと云ひ伝ふ。貞元年間惠内阿彌陀聖像を草創す。(天正十八年台命あ  
 り。依つて阿彌陀山と号す)昔は阿彌陀寺と呼ばれたりしを、慶長十二年近衛  
 関白信尹公武藏國に下り給ひし時、隅田河清源のゆくてに當寺へ立ちよら  
 せられ、寺号を改むべきはいかにとありしに、寺僧庇請す、依つて木母寺  
 の号を賜ひぬ。

梅若丸の塚 木母寺の境内にあり。塚上に小祠あり。梅若丸の墓を稱  
 りて山王梅塚とす。(梅塚に梅若丸は山王梅塚の社境なりと云ふ)後に柳  
 を植えてこれを印の柳と号く。(昔の柳は枯れて今若木を植ふをへたり) 一  
 例年三月十五日忌日たる故に、大倉弘興行あり。この日都下の貴賤皆参  
 り。  
 縁起に云く、梅若丸は落胤北白川古田少将梅房卿の子なり。(同じ縁起  
 に、惟明無期なきを憂へ、日吉の御神へ祈願ありて後附けられたりし果な  
 れば、辨侍も得たる梅が枝に突き出でたりし一花のこもすればとて、梅  
 若丸とは号くるなりとぞ)五段にして父に後れ、七歳の年比叡の月林寺  
 に入りて習学せり。又その頃東門院といへるにも松若丸といふ果ありて、  
 白頭才の程を挑み争ひけれども、梅若丸にはおよばざりけり。さるをかの  
 坊の法師原口惜しき事におもひ、はては闘争の事出来にければ、梅若丸は  
 僧に身を通れて北白川の家に帰らんとし、吟ふて大津の浦に至る、頃は二  
 月廿日あまりの夜なり。然るに陸奥の偶夫藤太といへる人商人に川遊び、  
 藤太が為に欺かれて、過ぎ東の方を下り、からうじてこの隅田川に至る。  
 時に貞元元年丙子三月十五日なり。踏の程より舟に乗り、この日此に此地  
 に於いて身まかりぬ、いまはの際に瘞瘠を瘞す。  
 取ねきてとはとこたへよ都點すみだ河原の路と消えぬと

この時、隅田川に、下総妙忠内阿闍梨として世に響きありけるが、通に会し、土人と共に謀りて、児の亡骸を一舟の塚に築き、柳一柳を流して印とす。翌年の弥生十五日日人集まりて私名を称へ、児のなき跡をとりわらひ侍りけるに、その日物若丸の母若丸(同じ縁起に、世御前とす。實は同姓上の長者の女なりとあり。或は云ふ、在子とも。縁起引して妙重尼と号く。第六巻段草が原の条下とあはせざるべし)児の行跡を尋ね給ひ、みづから物狂はしき様にして、この隅田川に吟ひ来り、青柳の蔭に人の指して称名せるをあやしみ、舟人にその故を問ひ聞きて、我が子の塚なる事をしり、悲歎の眼にくれけるが、その夜は僧人と共に称名してありしに、その塚のかげより物若丸の姿現佛として、灯の容を現し、甘露をかかずかと思へば、春の夜の明け易く、唯の禊と共に消えうせぬ。母若丸は夜あけて後、忠門阿闍梨に見え、ありし亦どもを告げて、この地に草堂を営み、阿闍梨をこゝに祀らしめ、常行念仏の道場となして、児の亡跡をぞ申ひける。(以上木村寺縁起の頭を摘む。)



(江戸名所図会より梅若果園へ)

## 隅田川神社の栞

当神社は「江戸名所図絵」にもみえるように、古くは「水神」または「水神宮」と称しておりましたが、明治五年に隅田川神社と改称せられました。

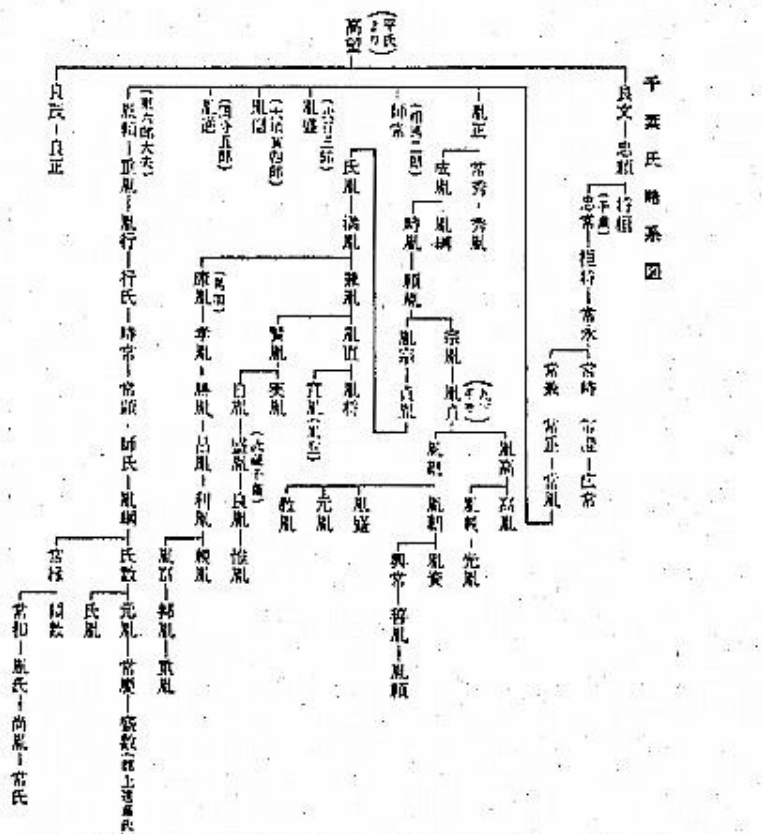
御鎮座の年代については詳しく知ることはできませんが、治承の頃、源頼朝が関東に下った折、暴風雨に逢い、当社に祈願したと伝えられております。この土地は小高い浮洲になっていて、出水の折にも水没することがなかったところから、古くは「浮島の宮」とも呼ばれていました。

当神社は隅田川の総鎮守であり、水上安全の守護神として崇敬を集めております。昭和の中頃までは水上渡御祭が盛大に行われました。江戸の名物の一つである「両国の川開」も水神感謝のお祭なのであります。

石浜の城址

「鎌倉大草紙」に云く、千葉介胤直、上杉忠房に譲らば、父子兄弟共に一味して成氏に背く。ここにまた故千葉満胤が二男陸奥守入道常輝父子（その子を孝胤と云ふ）下総国馬加の城より打つて出で、成氏の味方となりて合戦す。竟に享徳四年三月二十日胤直敗北し、その子胤直および千葉入道常輝、舍弟中務入道了心等悉く切腹す。よつて陸奥守は千葉へ移り、千葉の跡を継ぎける。然るに、上杉よりは、中務入道了心の子息実胤・自胤二人を取り立て、下総国市川の城に権睡る。ここにおいて、千葉家二流となり、総州大いに乱る。その頃京都より、東下野守作縁、陸奥守遠治として馬加の城へ馳せ向かひ攻め戦ふ。陸奥守かなはずして千葉へ引き退く。泰正二年の正月成氏市川の城を囲む。同じく十九日落城して実胤は武州石浜へ落ち行き、自胤は向赤塚へ移りける。その後上杉家より胤直の一跡として実胤を千葉介に任せしむ。されど成氏陸奥守の子孝胤を總領ありて、千葉に居を置かければ、（孝胤はその父陸奥守入道常輝と共に、故胤直兄弟を亡し、成氏へ奉公の人にして、故成氏より千葉の跡を賜はりしなり。）実胤は城へ入る事かなはずして、武州石浜葛西辺

を知行し、時を待ちて居たりしが、世の中を成懐し濃州に閑居す。依つて上杉家より実胤の跡を兄の自胤に賜はり、千葉介に任ず。これを武州の千葉と号す。



千葉氏系図  
文二三回史跡めぐり資料（佐倉市）ヨリ

### 石浜神社（朝日神明宮）

「江戸名所図会」に朝日神明宮・橋場にあり・石浜神明とも、或いは俗に、橋場神明とも号く。祭神伊勢に同じく内外兩皇太神宮を齋々まつる。社伝に云く、八皇四十五代聖武天皇の御宇、神龜元年甲子九月十一日鎮座と云々。

真先稻荷明神社・社伝に云く・久代十葉介兼胤の家に靈珠を伝ふ。この靈珠の加護にや、数度の戦場に先登の誉あり。

同守胤の代に至り、この石浜の城主たりしが、城内の鎮守としてかの靈珠をもて稻荷に勧請し、真先稻荷明神と号すと云々。

石浜渡津跡・このあたりは「住田（隅田）の渡し」として陸奥への交通の要路であり、物資の集散地としてにぎわいをみせていた。境内には、この渡しを背景とした歴史と風光をしのばせるいくつかの石碑がある。

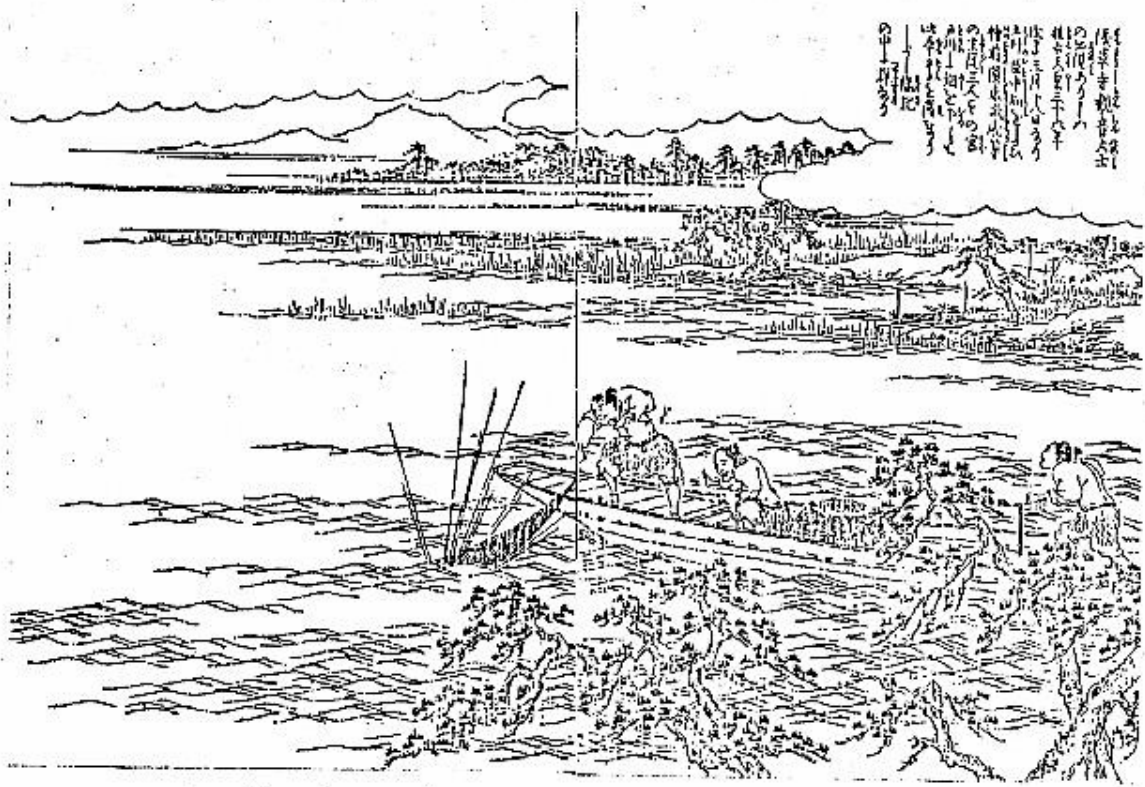
### 浅草の文化と浅草寺

江戸幕府が、寛永寺を中心に、京都の文化を取り入れて定着させたのが、上野の文化だとすれば、それと対照的に、浅草の文化とは、浅草寺を中心にした庶民文化だということとが考えられる。つまり、浅草とは、浅草寺（浅草二ノ三ノ一）の歴史を忘れては語れないという意味である。

それなら浅草の文化とはなにかというのだが、まず浅草寺をみると、平安時代頃よりもう浅草寺の名はみえ、関東や東北をおさめる武符の折願寺として、その間も多くの武将による寄進がさかんで、法灯を絶やさなかった。近年をみてわかるように、堂宇が焼ければ再建する、再建につぐ再建が浅草寺の歴史であり、観音信仰の重要な拠点として繁栄すると共に、そこに、庶民文化の発達過程も知ることができるのである。

浅草という地名は「吾妻鏡」（文永年間一二六四―七一の作か）によってまず知らされる。源頼朝（一一四七―九九）が鎌倉鶴岡宮の造営のために、宮大工を浅草からつれていくのである。「武蔵国浅草大工字郷司を召し進めべきの旨……」とあり、浅草寺とその周辺の集落が想像もされるのである。浅草の地名が、麻草とかあかさの草木からの変化の説もあり、人が住むようになって、自然的現象が地名になった可能性が考えられ、「東京府志料」も、「浅草の名義確証なし。大抵武蔵野の内にては草の浅かりし故なるべし」と記している。また、浅草一帯は、古墳時代末期になったといわれるデルタ地帯で、漁撈に従事するため、早くから土着した人々もあり、観音を網にかけたという檢前氏なども、多分にその例ではなかったか。

此の地は古くより  
 漁業が盛んであり  
 舟師の多く居る  
 故に舟師の地と  
 稱せられたり  
 舟師の地と稱せ  
 らるるは舟師の  
 地を指すなり  
 舟師の地と稱せ  
 らるるは舟師の  
 地を指すなり



(江戸名所図会ヨリ鮭舟縁起)

金澤山邊寺 伝法説と号す。慶長順礼所第十三番目なり。天台宗にし  
 て、東叡山に居せり。

本尊縁起に曰く、人皇三十四代推古天皇の御宇、土師臣中知といへる人  
 故ありてこの地に漁漁ふ。日本紀に曰く、垂仁天皇三十一年野見宿禰  
 に始めて土師臣の姓を賜ふとあり。野見宿禰は天智日命十四世の孫なり。  
 こゝにいへる中知もこの遺裔なるべし。山岡河野陀伝云ふ、中知は奈加  
 登茂又登茂登利とも號すといへり。家出拾遺成・武成と云ふ二人の兄  
 弟附き添ひて、主従三人恒に漁業を産業とし、こゝに年月を送りけり。  
 (拾遺成は拾遺に作る、新撰陸氏録に拾遺商人連と云々。然る時は拾  
 前に作りて可ならん歟。新撰日本後紀に、拾遺商人直山加麻呂、武蔵國  
 加與那の人にして土師氏と祖を同じうすとあり。又、延喜式、兵部省附  
 加與那の牧の中にも、武蔵國拾遺、馬牧とあり。これらによるときは派  
 成・武成もこの偏の人ならん歟。同三十六年戊子三月十八日の朝、拾遺  
 に引渡えて香洲に風船かなりければ、小舟に乗り、此所の沖に出でて網を  
 下すに、(汲深川むかし海にちかし、旧名を京戸川と稱す)遊魚はさらに  
 なく、幾度も同じ観音大土の尊像のみかより賜ふ。興船に至りてもいよいよ  
 よしかり。依つて非徒驚きこれを奉持して帰り、機縁の浅からざるを思ひ  
 て、その家に安ずといへども、唯魚の縁に難る事恐るのみ。(世に、  
 草刈の葦葉まつて、琴をもつて飯の御齋を敷るといへる事、縁起に所見な  
 し。)こゝにおいて、終に魚命を祀らためて一字の香堂を造置り、かの尊  
 像を安置し奉る。





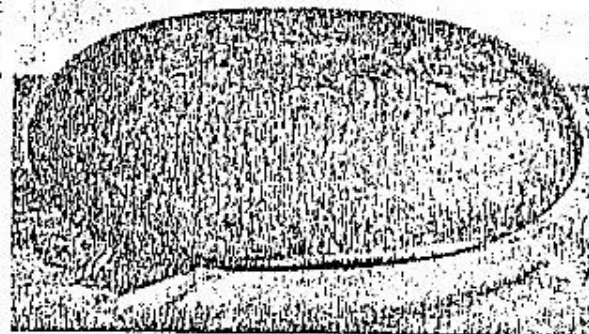
浅草が原一つ家伝説を描いた頼馬（歌川国芳筆）

浅草が原一つ家伝説 浅草の観音堂に詣でた方は、外陣の間に並べて掲げられた大きな松男の数々を見知っておいでだろう。その中に浅草が原の一つ家の伝説を扱った一勇斎歌川国芳作の一枚がある。横一・八メートル、横三メートルの画面には、左端に片膝を立て顔ばいて静かに眠る美しい稚児の姿があり、中央より右手にかけては片肌抜いで短刀右手に、銅條箱の形相をした老婆と、必死になってその眼にとりすがる可憐な娘との激動した姿態が描かれてコントラストの妙を示している。国芳の慣作の一つであることは古来衆目の認めるところだ。

さて、浅草寺にはその由来を記した縁起が、絵巻をも含めて数種ある。

中でももっとも古い源文体の「承徳縁起」に右の話が期記されている。これによると浅草寺の東北、橋場村あたりは、そのむかし浅草が原という一面の原野であった。惟吉天皇のころ、この原中の一つ家に、娘をかかえた老婆が住んでいた。だが生活に窮した昨今、老婆の所業たるやまことにすさまじい。なに世野中の一軒家のこと、賤れきった往來の旅人が、灯に慕い寄る夏虫のようにこの家へ足を休めたとき、そこに待ちかまえていたのは年ごろの娘の愛憎まじい微笑と、親切ごかしの老婆のもてなし。旅人がこれにすっかり気を許し、一夜の宿を求めたのも無理からぬところである。だがそのあとがいけない。石の枕をあてがわれ、安らかな寝息をたてはじめた旅人の頭上に、ころを見はからって、天井に細で引上げられてあった大石が容赦なく落下する仕組みなのである。縁馬のごとく、ときには刃物を用いて殺害の筈に出たこともあったのであるか。こうして老婆が多くの人命をそこなってきたため、いくら人跡まれな土地とはいえ、そこは奥羽に通じる街道筋、いつしか悪い噂がひろまって、やがては観音堂への参詣人さえとだえがちになっていった。

そうした折も折、容顏美麗、いかに名山ありげな若い旅人がこの家を訪れた。老婆はよくそ察みつつ、例によってわが娘に旅人の夜伽を命じる。ところが娘はその気品のある美しさに打たれ、初めて悪心をおぼえるとともに、おのが身の悪業を恥じずにいられた。彼女が旅人の身代わりとなって死の床につき、若い命を散らしたのは、それから間もないことである。してやったりと灯火をかかげ室内に踏み入った老婆が、この意外に後悔の膺を喰んだけれども及任ない。かわいい娘をわが手にかけて失ったいま、生きながらえてもせんかたないと、老婆は思い届したあげく、背戸の池に身を投じ、わが子のあとを追って死んでいく。実はこの旅人こそ観音堂の化身で、観音堂から祖國からの一つ家の老婆の悪業を無視するにしのびず、仮りに示現されたのであった。



老婆が旅人を殺すに用いた石枕（浅草寺妙音院蔵）

### 浅草神社

浅草神社（明治六年から呼称、浅草二ノ三ノ一）は、浅草寺観音堂の右隣り（東側）にあり、三社さまの愛称で呼ばれている。三社すなわち浅草寺の本尊発見に功あった土師真中知、桧前浜成、竹成に、加えて東照権現を祀り、三社権現ともいわれ、親しまれている。

社殿は浅草寺観音堂と共に、慶安二年（一六四九）十二月徳川家光により再建されている。江戸時代初期の権現造り、朱塗り、長押に極彩色の文様を施すなど、華麗の上もなく、本殿、幣殿、拝殿、渡廊下共に昭和二十一年（一九四六）十一月国重要文化財に指定された。

浅草神社には、古くから伝えられている舞楽面があり、そのなかの最古と思われるのは元久三年（一一〇六）三月十八日の銘がある。

三匠句碑とは、自然石の大きな背石に、「ながむとて花にもいたし頭殿骨 宗因」、「花の雲跡は上野か浅草か 芭蕉」、「ゆく水や何にとどまる乃里の味 其角」と刻したところから三匠の称がでたのであろう。文化六年（一八〇九）三月飯塚嘉業惣業英建、聖歩共阿書とみえて、句碑建立の意は不明だが、もと旧人磨居堂畔にあったもので、明治二十七年（一八九四）春、現在の浅草二丁目あたりに住んだ写真家江崎礼二（寓は谷中霊園甲3号1側にある）ほかが発起人となり、移建した旨台石に記されている。



室町時代制作の六角堂

六角堂（都有形文化財）は浅草寺では最古の建物であり、室町時代制作のものとして都内でも優秀なものである。構造は六角形瓦葺造りの小堂、柱と柱の間九一センチ、直径が一・八二メートルで、現在は日隈地蔵を祀っている。

西仏の板碑（都有形民俗文化財）は、寛保二年（一七四二）八月一日の暴風で倒れ、三つに折れたのを、文化十一年（一八一四）修復、台石及び石枠に支えられて建っている。現在の高さ二・一三メートル、幅五十五センチ、厚さ六センチで、折れたあともその巨大さに変わりはない。年月はないが、様式から鎌倉時代のもものと推定され、石柱銘による鎌田三郎入道西仏が、妻子の後生安業を祈願して建てたというのが通説になっている。上から種子（梵字）を雄渾に刻し、中央に釈迦像、下に壺瓶、西仏敬白とある。右脇に合掌の童子像、先立った妻女の供養に内容がよめる。その大きさ、内容からも、都内では貴重な存在といえよう。西仏の板碑の右側は、他の形の上に建つ三十六歌人碑、化成年（一八〇四―一三〇）の三十六人の歌人たちの和歌三十六首が刻されている。茶屋のうしろは力石の碑（新門辰五郎銘）、うしろを廻ると戦災平和塔がみえ、その前方は奥山入口へとつながっている。

淡島堂付近——淡島堂のある場所は、そのむかし東照宮があったところである。浅草東照宮というのは、元和四年（一六一八）四月十七日光東照宮と同時に遷座したとあり、寛永十九年（一六四二）二月十九日観音堂全焼により類焼し、以後再建されなかった。現在の二天門が東照宮隨身門であり、淡島堂に架る石造階を渡って、東照宮に至ったのである。したがってこの淡島堂は、弁天社などと共に元禄以後建立されたと思われる。紀州から勧請した虚空菩薩を本尊としたとみられる。現在、淡島さまとして、毎年二月八日は針供養が行なわれ、三室にのせられたとうふに、日頃使って折れた針やさびた針がさされ、供養日は、これら女性で賑わっている。

石造階は元和四年（一六一八）の架橋と思われる、東照宮への神橋でもあった。和歌山城主浅野但馬長晃が、元和四年四月十七日の遷座儀式と同時に奉納したものであろう。小さい石橋だが、細工もよく、今日まで美しい形で保たれている。

浅草神社に近く、浅草寺の側門として二天門（固重要文化財）がある。元和四年（一六一八）、今の淡島堂付近に建てられた東照宮の隨身門で、当時のままの姿で現存している。両脇の神像は、寛永寺（上野桜木一ノ四ノ一一）蔵有院靈廟の二天門（のち勅額門に収収）にあった木造持国天、增長天（共に都有形文化財）を移している。

淡島橋手前の右側をみると、六地藏石灯笼（都旧跡）とあって、高さ二・三メートルの火袋に六地藏の刻した石灯笼がある。久安二年（一一四六）六月源義朝が浅草寺参詣の折、家臣の鎌田兵衛政澄が奉納したと伝え、隣りに建つ重蔵六地藏碑（明治二十五年長岡護美撰）がその旨を記している。いかに硬い小松石とはいえ、年輪をへて風化はげしく、銘はよみとれない。応安元年（一三六八）制作ともいうし、浅草寺の綱野有俊氏による石灯笼の形式、役割からみた文安三年（一四四六）説などもあり、つまびらかでない。この灯笼は、もと浅草は小路通り花川戸入口付近にあったもので、明治二十三年（一八九〇）現在地に移された。



六地藏石灯笼

弁天山——弁天山の正面、文政十三年（一八三〇）建造の石段を上ると、右側に鐘樓がみえてくる。この鐘樓の梵鐘は、江戸時代から大正末期まで、浅草の時の鐘として有名で、今次大戦の戦火を受けたが、現在なお朝六時、また除夜の鐘として鳴らされている。鐘の高さ二・一二メートル、直径一・五二メートル、鐘銘によると元禄五年（一六九二）八月改鋳とあり、鋳造者は太田近江藤原正次、下総関宿城主教野成貞が黄金二百兩を喜捨したこと、黄鐘音がでるなどと伝えられてきた。



浅草寺時の鐘

老女弁天山を中央に祀るほか、狭い山内には多くの石碑

が建立されている。石段の左側をまですると、扇塚、芭蕉句碑、唾蟬坊碑、都々逸塚、そして山上は、天保八年（一八三七）七月正面梵字を配した掛写観音極塚、また鐘樓側の寿酒井、鳩塚などは最近のものようである。

扇塚は昭和三十九年（一九六四）四月、初代花柳徳太郎（一八七八—一九六三）を顕彰し建てたもので、扉風と台石を白であしらひ、中央に黒光の御影石に白く浮かした舞扇を配するという仕組みである。芭蕉句碑の方は、長方の自然石で右上部が少し欠け、正面に「くわんをんのいらか見やりつ花の雲はせを」と記し、下部に芭蕉翁の縁刻がある。また像の右に、「寛政八年（一七九六）丙辰十月十二日依樓屋□□笠翁之圖左寫」などとみえる。

#### 宮戸座跡の碑

宮戸座は、明治二十九年九月に開場、関東大震災で焼失後、再建されて昭和十二年に廃座となるまで、庶民の劇場として大いに親しまれた。その規模から小芝居の範圍を出なかつたが、歌舞伎のほか、連鎖劇、新派なども演じられた。ここから、歌舞伎の尾上多賀之丞（鬼丸）などを輩出した。また、沢村源之助、沢村伝次郎（訥子）、松本高麗三郎、市川鶴之助らは、歌舞伎で上演せぬ世話ものもこなし、小芝居の名優として、今なお語り伝えられている。記念の碑は、昭和五十三年に浅草三ノ二ノ七に建てられた。

「江戸猿若町市村座跡碑」（浅草六ノ一八ノ一三小竹氏宅前）をみると、この付近は、江戸猿若三座があり、江戸から明治初期にかけて、芝居の中心として栄えたことが想像されてくるのである。

天保十三年（一八四二）水野忠邦の天保改革で、日頃、風紀を乱すと幕府がおそれた芝居小屋は、現在の中央区から猿若町（歌舞伎の座主猿若三郎の名をとった）に所替えになった。この猿若町を三町に分け、一丁目は堺町の代地として中村座、二丁目は森屋町の代地として市村座、三丁目は木挽町の代地として河原崎座（守田座）がつくられた。以後、浅草観音、新吉原のなかつぎとして、この芝居小屋が栄えたことはいままでもない。それは芝居をする側みる側を通じて、江戸の風俗文化の創成に、かなりの大役を果たしたといえるからである。しかし、明治五年（一八七二）には守田座が日木橋新富町に移って、その後新富座となり、同十六年（一八八三）には中村座が浅草西島越町に、同二十五年（一八九二）市村座が下谷二長町に移って、猿若三座の繁栄の灯は消えたのである。

姥ヶ池旧跡周辺

浅草寺の東方にあたる花川戸二丁目五番区立花川戸公園に、「姥ヶ池乃舊跡」碑がみえる。姥ヶ池跡は都旧跡に指定されているが、そういえば、浅草寺伝説として捨馬に残る「一ツ家」の老婆が、姥ヶ池に身を投じた伝えがあった。姥ヶ池とは後世につけた、老婆の池からの発想であろうか。それは石枕伝説ともつながるもので、観音示現の方法として妙を得た方法でもあった。それはまた、室町時代中期の伝説づくりに拍車をかけ、観音信仰の利益と結びついて、民衆の間には語り伝えられた。

准后道興の作とする「國國雜記」武藏の部に、この石枕伝説ははじめてみられ、文明十八年（一四八六）秋、道興が大僧正の位を捨てて東上し、この浅草の地で紀行文に収めたわけである。妙音院（浅草二ノ三ノ三）には石枕と伝えている。これは老婆が旅人を殺かせるのに用いたと伝えている。

花川戸公園の入口、姥ヶ池旧跡近くに助六歌碑というのがある。御影石の柱塔形で、高さ二・一メートル、台石からでは三メートル、正面に、「助六にゆかりの紫の紫を弥陀の利剣で曳は外なり 剛洲」とあり、明治十二年（一八七九）六月五日九世市川團十郎はかが建てたことが記してある。剛洲は團十郎の号。

歌舞伎脚本の「助六」は、花川戸の俠客助六が吉原三浦屋の遊女揚巻となり、仲之町で武士と争うとして市川團十郎により上演され、のち歌舞伎十八番として市村座で開花した。筋よりも芝居に徹した伝統的古典劇として、今日にも受けつがれている。明治十二年團十郎はこの「助六」を上演し、大評判をとったことから、興行のたびに世話になった日本橋万町の椿彦と須永彦兵衛の菩提寺「仰願寺」（清川一ノ四ノ六）にこの碑を建てたが、関東大震災で崩壊、そのまま土中に埋もれていたもので、昭和三十三年（一九五八）十月現在地に移建された。

待乳山聖天

待乳山聖天（浅草七ノ四ノ二）のある小高い丘（関東ローム廟の一つ）は、近くに、隅田川、今戸橋、山谷堀とあった、古来からの江戸名所を一望にみだてた場所でもある。「待乳山聖天



江戸情緒をしのぼせる待乳山聖天築地跡

縁起録」によると、「推古三乙卯淺草寺観音菩薩御出土の光瑞に九月廿日金輪際より一夜に崩現の山也、其時金の布此処に下伏す」と、浅草寺及び金蔵の舞との因縁をも述べている。

江戸時代も東都名勝地として、この待乳山が隅田川を借景に、錦絵などに描かれ、「紫の一本」の著者戸田茂暉も、「哀れとは夕魁えて行く人も見よ まつちの山にのこす言の葉」の歌碑を建てている。木碑は秋喜天、講堂からみると、築地跡は江戸からの趣きを伝えているし、境内には、江戸以前の石像という出世観音立像や、戦時中の隅成官揚をしるした浪曲双輪塔、トーカー渡米と日本での公開等を刻明に記した「トーカー渡米之碑」などもみえる。

新設江戸名所図会

角川書店 発行

隅田川神社のしおり

隅田川神社 刊

東京の中の江戸

角川書店 発行

台東区の歴史散歩

台東区教育委員会

ヨリ転載

## 伝法院と庭園

五重塔から西南に約五十メートルのところ、浅草寺の本坊にあたる伝法院がある。總面積二万四八〇〇平方メートル、その本坊と庭園は、外界の騒音と離れて静寂そのものである。伝法院とは、元禄三年（一六九〇）頃の住職宣存の坊名だというが、それが浅草寺の院号に変わったようだ。安永七年（一七七八）十月掲額された伝法院の扁額は、公邊親王筆になり、現在も客殿正面に掲げられている。この本坊は安永六年十月建築のもので、数度の修復をへて現在



伝法院庭園

に及んでいる。

庭園は約一万二〇〇〇平方メートル、その作庭年代、作者など不明だが、ほぼ寛永年間（一六二四―一六四四）、また寺伝では小堀通州（一五七九―一六四七）作という伝えもある。北東と西南を結ぶ心字池が設けられ、出島を配して京都桂離宮の廻遊式庭園に似せるなど、心遣い配置の仕方である。往時は茶庭でもあったか、現在も茶の木が点

在するし、諸方にある井戸など、その名残りのような気もする。そしてこの庭園が守られたのは、浅草寺だからこそと思うし、いまでは区内唯一の庭園として、憩いの場所として活用と保存が望まれるのである。

庭園池畔で目につくのは、石棺と銅鐘である。石棺は明治初年に観音堂裏から発掘されたもので、蓋はなく、また人骨も発見されなかったという。至徳の鐘という銅鐘は、はじめ二天門の北側にあった鐘楼に吊されていたが、神仏混交の禁止で現在地に移った。銘に至徳四年（一三八七）とあり、都内でも古鐘の称がある。高さ九七・六センチ、竜頭の高さ二八・八センチ、直径六七・三センチ、厚さ六センチで、銘文中に、「西郡勝地。特開榛莽泐此遺場。」とあり、当初から浅草寺の鐘として鋳造されたものではないらしく、それならば西郡の勝地はどこかの諸説もでて、網野有俊氏の考証では、浅草寺中興の僧忠蒙が、北条氏康の江戸家老速山直景の子であることから、小田原周辺の足柄上郡が西郡と称された故事にちなみ、そのあたりから移されたのではないかと、の憶測をしている。この至徳四年とは足利義満の時代、南北朝の末であり、後小松天皇がこの年八月嘉慶に年号を改めている。

施無畏橋を渡ると右側の経り鳥上に、宝篋印塔の忠蒙墓がある。忠蒙は慶長十四年（一六〇九）八月四日没している。左は坂道になっていて、上ると茶亭天祐庵がある。

天祐庵は尾張名古屋の茶人牧野作兵衛が、天明年間（一七八一―一八九）千利休の不審庵を模倣したもので、現在不審庵は再建のものだけに、その実体を伝えている点で最古といえよう。天祐庵の名は、関東大震災の折も、その寸前に移築して難をまぬかれたことからつけられたという。

## 雷門

雷門は昭和三十五年（一九六〇）五月松下幸之助氏により再建されたものだ。鉄筋コンクリート造り、間口一一・五メートル、高さ一一・八メートル、右に風神、左に雷神を祀り、天下太平を祈願、古くは風神雷神門といわれていた。雷門は浅草寺の総門であり、そのはじめは平公雅により、駒形付近に建てられたという。雷門は数度の再建の歴史があるが、現在以前は慶応元年（一八六五）十二月浅草田原町の火災で焼失している。その後は仮設門がつくられてあった。右の風神、左の雷神は、慶応の火災で頭部のみを残し焼失、明治七年（一八七四）塩川運玉が補刻し、今回は森大造、荻原雅春の両氏が補修彩色を施している。

## 宝蔵門

旧仁王門を再建し、宝蔵門と改めた。浅草寺の山門にあたり、縁起では平公雅が武蔵の国守に赴任した天慶五年（九四二）、折願成就の礼に建立したのがはじまりという。戦災で焼失するまでは、慶安二年（一六四九）十二月徳川家光建立の仁王門が同じ場所にあった。

宝蔵門は鉄筋コンクリート造り、間口二二メートル、高さ二一・七メートル、上部二層に収蔵室を設け、浅草寺宝を収蔵したことからの名でもあり、昭和三十九年（一九六四）三月大谷米太郎寄進により再建された。左、阿形像は錦戸新観、右、吽形像は村岡久作の両氏が制作（阿は口をあける発音、吽は口をしめる発音とみて、仏像の顔をみるとわかる）、兩者とも桧材、高さ五・四五メートルの巨像である。浅草寺の提灯もそうだが、ひとときわ大きい宝蔵門の提灯は、区内に住む五十嵐鉄雄氏（根岸三ノ二ノ一四）が制作している。

## 五重塔

徳川家光が慶安元年（一六四八）、弁天山左に建立した五重塔は、今次戦災で焼失したが、昭和四十八年（一九七三）十一月、講堂などを備えた塔院造り新様式の五重塔が

再建された。構造は鉄骨鉄筋コンクリート造り、高さ地上から五三・三二メートル（京都の東寺の五六メートルに次ぎ、日本で二番目の高さという）、九輪一五・〇七メートル、五層の奉安殿にはスリランカ、イスラムニア王立寺院からの仏舍利を納めている。

## 駒形堂と戒殺碑

浅草寺堂宇を語るとき、「駒形堂は浅草寺の門口にあり、馬頭観音を安置せらる。安房の太守平の公雅の立られし所なり。梵音海潮のひびきを浅草川の波にあらはし、定業能転のちかひは駒形堂の軒にしめす。……」という「江戸名所記」（寛永二年刊）を思いだが、駒形堂が一説には観音像引上げの地ともいわれ、その堂宇のあったところとも伝えられている。本尊馬頭観音像は三面六手の木彫、三〇センチにみたぬ小像で落生道の救主とされている。現在の堂宇は昭和八年（一九三三）四月再建のもので、三・六メートル四方、鉄筋コンクリート宝形土蔵造りで、駒形橋際の区立駒形公園（雷門二ノ二ノ二）内にある。

駒形堂の左隅をみると浅草観音戒殺碑（都有形民俗文化財）というのがある。本尊馬頭観音（馬、畜生の守護神）とこの戒殺碑となんらかの関係があるかどうか不明だが、五代將軍徳川綱吉（一六四六一一七〇九）の有名な生類憐れみの命令の一端として、元禄五年（一六九二）九月には隅田川の魚捕獲を南は諏訪町から北は聖天町まで禁止するという札が建てられ、翌六年三月に、浅草寺別当宣存により碑が建立されたとみられるのである。

碑は下方の一部が欠けていて、これは関東大震災後土中から発掘され、昭和八年再建と同時に補修されたもので、高さ一・六七メートル、横六三センチ、厚さ三〇センチ、上部「戒殺碑」は隸書で刻されている（碑の字欠ける）。



五重塔  
五重下  
ワタシ買券買沢村貞子さん

わたしは  
浅草が大好き  
佐渡院 浅草寺 助産園  
境内では  
羽子板市  
ヨシヨシ

三味線川島  
味のり  
羊のころも  
美味!

紅梅少焼 1枚300円  
おぼとう餅  
ほし布豆 500円-800円

昭和53年3月  
17、18、19日 福本神  
宗現1350年  
大開帳  
東照宮  
雲あし 常盤堂

浅草観音  
ガサ市  
この真  
では恒例の  
だ  
羽子板市  
下況師走で  
SOS  
SOS

羽子板市  
瓦せんべい  
木村家  
人形本舗  
金瓶山  
おとし堀田酒店  
院通リ  
入形テラオ  
あししいづみ  
から焼き  
せんべいかワチヤ  
人形焼  
危屋

仲見世食館  
松ヶ枝屋  
いわた屋  
小町屋  
SAARU

松海堂  
富士屋呉服店  
紳士用品中屋  
和波かづさや  
洋品フジヤ  
新橋 慈久屋  
洋傘モリタ  
ハンドバッグ  
たかしまや

洋品フジヤ  
新橋 慈久屋  
洋傘モリタ  
ハンドバッグ  
たかしまや

おとしいなかば  
あし北 評判堂  
おぼ餅  
仁王  
せんべい

川端  
康成  
浅草寺  
金瓶山  
クク

羽子板市  
下況師走で  
SOS  
SOS

人気傑出  
坂東玉三郎  
年の瀬告げる  
羽子板市は  
今日(19日)が  
最終日!!  
おぼ餅  
700円  
(10個)

忠割  
現在5日  
SAARU  
「浅草紅団」  
などの作品に  
仲見世の店屋の  
様子まで詳細に  
記録している...

浅草紅団  
などの作品に  
仲見世の店屋の  
様子まで詳細に  
記録している...

川端  
康成

「浅草風土記」  
「仲見世」  
「新仲見世」  
などを書いた

川端  
康成

(東照宮神門)派出所  
右が風神、五ヶ宿神、重には、天竜(明)金龍也